

これはずいぶんと不思議な映画だ。まるで舞台劇を見ているようで、それでいて、やがてとても深遠な自然界の真理のような雄大な世界へと、観客を導いてくれる。

人との葛藤、それもほとんどが監獄という限定された状況の密室での話だというのに、アンソニー・ホプキンスの語りから、やがてつむぎだされる、彼が多くの学問と体験と実地の観察と多大な時間を費やして体得したのだろう自然界の定理ともいえる物語、その力強さと無限とも思える広がりには圧倒させられたのだ。

なんといってもアンソニー・ホプキンスの存在感は際立っている。長い白髪、ぼさぼさの髭。着古された木綿の服。外見や服装は、身体を引き立てるには、あまりにみすぼらしい。おまけに手錠をつけられ身動きさえままならないというのに、そこからあふれる、彼のみなざるエネルギーと気品はどうだろう。

全存在、体そのものが語りかける。そこには、大学教授にまであり地位も財産も家庭もあり名前も知れた人類学者であった男の品性と知性が確かに感じられるし、また一方で事件を契機として噴出した理不尽な出来事に対する怒りも内面に秘めて、それを体であらわし、かつ自分の確かな意思をも持続させる強靭さを持ち合わせている。

知性、品性、怒り、肉体、このアンビバランツなすべてを、ホプキンスという人は実によく共存させて持ち、そして制約のあるがんじがらめの枠のなかであって、体中で表現してしまう。また、すべての真理を知ってしまった、まるで哲学者のような遠くを見るような目。この目のなんと、多くを語る力をもっていることだろう。

このホプキンスがなぜ殺人を犯したのか、その心理の理由と解明を志願し、ホプキンスと同じ出身のマイアミ大学からやってくる若い精神科医のキューバ・グッディング・Jr.はどうだろう。これはホプキンスとは実に対照的だ。

彼がホプキンスの精神分析をすることは、自身の名を売るためにもっとも効果的で、出世に結びつくということになっているのだが、キューバのストレートな志願は、むしろすがすがしい。わるびれることなく、自分の行動に対しても確信をもっているふうだ。

身寄麗で身体を包むスーツはぴったりだ。その服装ひとつに、彼が自分の未来と仕事に前向きで、いかに若さと自信と教養に満ちたものかをよくあらわしている。

だが、ホプキンスに会った瞬間に、彼のアプローチは、ことごとく通じない。でも一つもひるまない。精悍でチャレンジ精神旺盛で、あり

とあらゆる接触を試みる。

ホプキンスが大きな自然の中にそびえる山なら、キューバは、しなやかな豹のよう。その豹も計算ずくの豹なのである。

このドラマは大きく分けて三つに分けられる。初めて監獄の密室でホプキンスとキューバが向かい合う前半。この二人は、まったく相反する、端と端にいる。これが取調室の小さな机のまさに触れ合うばかりの間なのに、心理的には遠くに隔てられているという構図が、じつに面白い。そのあたりが絵柄としてもうまい。

二つ目は監獄のなかで、ホプキンスと監獄の多くの囚人たちの心情が重なり、そこにまたキューバの思いも重なっていくところ。ここには、ホプキンスの内面の思いが、他の囚人たちの体の中に眠っていた無垢な生の衝動とともに呼び覚まされ、それによって、ホプキンスが心に抱

無限の世界を創り出した俳優二人の力量に乾杯！

金丸弘美 (エッセイスト)





いていた生きざまが増幅され、拡大される。そしてキューバの囚人たちへの真摯なアプローチによって、より人にとっていちばん大切な原点みたいな、ありのままに生きることの素晴らしさみたいなものが鮮明に見えてくる。

そして三つ目は後半で、キューバがホプキンスが辿った道、それをようやく理解したとき、キューバもホプキンスも、いまだ監獄にいるのに、心理的には自然界の自由な大地を踏みしめているような開放感もたらされる。なんという見事な流れ。それもほとんどホプキンスとキューバの二人の芝居を中心に進められていくのだから舌をまく。

ホプキンスの泰然として、監獄の過酷な扱いにも揺るがない彼の前では、キューバは小さく見える。しかし、さまざまな角度からの真摯なコミュニケーションのチャレンジは、次第にホプキンスの苦悩、そして彼が得たホプキンスの後ろにある大きな自然界への真理が浮かびあがっていく。

この二人の関係は、まさにドラマの中心でありドラマそのものなのだが、キューバとホプキンスの、ぶつかりの緩急が、どんどんと話を膨らませていく。この間合いの素晴らしさは感嘆するばかりだ。二人の描き方がとても面白い。

ホプキンスは、学歴を積み、教養を高め、そして自然観察の中で、ある真理に到達する。それは、自然のなかにはあるがままにして遠大な哲学があるという発見と悟りだ。それは、なにか世俗を離れ修行をした僧のようなのだ。俗なものを捨てて削ぎ落としていった末にたどり着いた孤高の世界の人に見える。

これに対してキューバは、そう、お釈迦様の周辺をぐるぐると巡りあらゆる難題にぶつかる孫悟空にも似ている。対応が早くて、めげるところがない。もっともこの孫悟空は、教養があり、ひとつずつ学んでいく賢さがある。彼の果敢なホプキンスへの、多面的な、心を開き話をさせようという試みは、そのことによって、ま

るでジグソーパズルを嵌めこんでいくように、ホプキンスの過去や暮らした自然界のことや、おこった事件の真相があきらかになっていく。

このキューバのひたむきな、若いねのような動きがあってこそ、ホプキンスの存在がますます輝いてくる。

哲学と悟りをホプキンスが持つなら、学識と若さをキューバが持ち、ホプキンスが真理を持つなら、キューバが謎解きをする。すぐれた心理劇であり、ミステリーでもあるというのが、この作品の突出しているところだ。

これは上質なサイコサスペンスドラマのようだし、よくできた舞台劇を堪能した気分だ。それにしてもホプキンスとキューバという役者の顔合わせの見事さ、その二人が小さな部屋から、まるで宇宙に広がるようなドラマを生み出してしまいうごさ。そのぎりぎりに生き方そのものをぶつけ合うような演技には、ただただ脱帽するばかりだ。

ホプキンスの存在とキューバの存在、この二人が絡むことによってこそ、この映画の奥行きは生まれたのだろうし、カーチェイスでもなく宇宙船で空を飛ぶでもない、だのにこの空間的、心理的、自然界に繋がるような世界を創出しもたらした、俳優の力量に乾杯したい。

